

# 旅の相棒

## 「パンクのクジラに身を預け」



「クジラみたいなコレに乗ろう」  
 一日千秋の思いで待ち続け、太平洋の向こうから水平線を越えて来日した、アユオクライドがピンク色のラメラメであつても落胆することなく、むしろ「ボクに合ってる」と歓迎したのは10年ほど前のこと。

近頃の思いやりも何もない、しかも10年後には誰からも使われないような言葉で書けば、「痛い奴」なのである。  
 まるでハリウッドスターのスーツ衣装というか女郎屋の着物というか、そんな外装に身を包んだ相棒との最初の旅は、長野にある観光牧場だった。のんびり走っても目的地まで半日はかす。現地では2泊しただけだったが、気の合った友人たちとバイクの真横にテントを張って過ごす時間は彼にとって「旅」と呼ぶに十分な道程だった。

以来、特に実家がある高知を中心とした四国は、瀬戸内海を挟んで広島から、太平洋側の海沿いを通して、高速道路を乗り継いで…何度も走った。他には宮崎から熊本経由の福岡、島根や鳥取など山陰をまわって山口、東北地方も北海道も数回に渡って走った。  
 「なんとかなるもんでね」  
 放蕩息子のように走り倒した結果の、これが自信に満ちた一言である。  
 「道具に頼るといふか、道具をちゃんと使う」

「ここだと思えますよ」  
 近頃はそんな友人っぽい言葉も吐いてみたりして、仲間からボロカスに反撃されたりもする。それでも「実は頼りにされることもあるんですよ」と妄想まじりに言う。  
 「わかるんですよ。旅路に呼ばれるというか、道の遙か先から声がするというか……。いやあボクもね、万人に理解されるとは思ってませんよ。でも道の声が聞こえるんですよ。こつこつを「風」に呼ばれる」とか「道に愛される」とか言うんでしょねえ」  
 母の背中であんな歌を連ねに、と歌ったのは昭和の歌姫・山口百恵だったが、彼の場合さまざまなトラブルを道連れに日本列島気まま旅は、兄弟誌編集部への入部で、まずは一区切りつきそうなき惑の春なのであった。



**旅人**  
 弘田史峰。34歳。高知県出身。'60年式F1との旅は今年でちょうど10年を迎える。



兄弟分からもらったナタは焚火用の木を作るのに最適。ケースは革で自作。乱暴に扱っても刃こぼれないタフな道具なのだ。



まだハーレーに乗る前に友人に作ってもらった鹿革バッグ。雨でずぶ濡れになったのは数知れず。これで2泊までは大丈夫らしい。



もとは首飾りだったが、見た目がグロテスクなお守り入れとしてバッグに結ぶ。相変わらず女性以外のものと結ぶのであった。



そのほとんどが「縁結び」のお守り。その結果、旅路と契ったのか、国道や県道と契ったのか……なぜか女性だけとは結ばれない。



羽織ったり腰に巻いたりして防寒する「野営地で最強」のラグ。これ1枚しか持っていないが、1枚あれば怖いものなし…らしい。



一番使い心地がいいグリップスワニー。修理を繰り返して使っている。たぶん次回同じモノを買うだろうと思われる。

